

序

『平城宮発掘調査報告 XII』として平城宮西辺中門と北門の間の外郭大垣にそった南北に細長い地区の発掘調査報告を世に出すこととなった。この報告は昭和43年から55年にかけての前後計13次にわたる発掘調査を実施した結果を一冊にまとめたものである。昭和43年の第47次、引続いておこなった第50次の発掘で南北に細長い建物と広場状の建物の全く見られない地域があり、平安宮でも宮域の西部に左右馬寮が配置されていることから、この地が平城宮の左右馬寮のいずれかにあたるものと考えられた。特に SB5955・5956 とした中央二間を間仕切り南北両側に十間と九間の細長い建物がつづく遺構は、昭和18年に騎兵隊に入隊した私にとっては厩舎の中央に乾草などの飼料置場と不寝番のいる場所があり、両側が長い馬房となっている建物を思い起させ、これは厩に関する施設であろうと直感したものであった。その後の調査でこの地域の北部に両廂の東西棟建物が何度もわたって建替えがありながらつくられていたことがわかり、ここが馬寮としては事務処理的空間であることがはっきりしてきた。

これまで平城宮内の長年の発掘で、官衙の一ブロックをほとんど発掘した例は、内裏と東大溝をへだてた太政官と考えられる部分と第一次朝堂院北方の大膳職推定部分とここしかない。一つの官衙の

奈良時代における変遷が詳細に検討できる貴重な例を加えたことになる。ただ、左右馬寮がすべてこのブロック内にあったのか、平安宮のように同規模の二ブロックを占有していたのかは今後の問題として残っている。また内厩の墨書き土器や主馬の墨書き土器の検出によって、平城宮の時代にこの一郭が終始厩に関連した役所によって占められていたことは疑いない。

この一郭に昭和45年に平城宮跡発掘調査部の建物が完成し、その一部に出土品を展示し一般に公開するとともに、出土品の整理・収蔵の施設を設けている。その後、研究所庁舎が春日野町から二条町に移転し、平城調査部の研究室は本庁舎に統合したが、出土品の処理および管理と公開展示部門として平城宮跡活用的一面を荷っており、地下遺構に影響をおよぼさないよう配慮した建物の構造についても附記している。本篇の内容などについて大方諸賢の御叱正をこう次第である。

昭和60年3月

奈良国立文化財研究所長

坪井清足